

第16回 外国語コンテスト

英語部門

2010年12月2日(木)に、中央教室棟3階第1研修室において、第16回の英語部門コンテストが開催された。今回は15名の応募者があり、例年よりも多かった。課題は自作スピーチの発表であり、長さは500語以内である。

毎年興味深いテーマでの応募者が多く、今回の15名のテーマも‘Get Over Loneliness’, ‘Courage to Speak’, ‘What I Learned from Short-term Studying in Canada’, ‘Think about Japan from British Slow Life’, ‘How Japanese People See Homosexuality’, ‘More Valuable Thing Than Money’等々、個性的で中身が濃いものが多かったことは喜ばしい限りである。

評価は2人の外国人教員(今回は法学部のジョン・ハミルトン先生と国際コミュニケーション学部のアイバン・コスビー先生)が審査員として審査して下さった。評価はスピーチの内容、文法、発音、表現力を見て行われ、50点満点で採点される。審査員の先生方のコメントでは、全体としてレベルが高い内容であったとのことである。一方で気を付けることとしては、スピーチは聞き手との関係性が重視されるものであるから、聞き手の目を見て話すことが必要である、スマイルも大事である、ゆっくり話し、また声を大きく印象付けるように話すこと、同じ言葉を繰り返すと単調になるので気を付けること等々の点が挙げられた。その結果、1位には現代中国学部3年生の陳美霖さん(‘Enjoy Your Life’)が、2位には現代中国学部4年生の水野雄太さん(‘1st Step’)と、経営学部1年生の木村貴仁さん(‘My Dream’)の2人が選ばれ、3位には経営学部2年生の都築亮さん(‘Light Novel’)が選ばれた。おめでとうございます。

今回と同じく、次回も大勢の学生の応募を期待

している。

(山田晶子)

ドイツ語部門

2010年度の名古屋語学教育研究室主催第16回外国語コンテスト・ドイツ語部門の本選が、2010年11月30日(火曜日)の午後4時40分より名古屋校舎中央教室棟3階にある第1研修室でおこなわれました。その結果を報告したいと思います。

今回の課題は、‘Eine billige Fete’(「安上がりなパーティ」)という題名のA4で1ページ弱のものを選びました。内容は、ドイツの若者たち、とくに学生たちのにぎやかで楽しい集まりに伴うちょっとした混乱とそのゆかいな結末をあつかったものです。楽しいパーティを期待して集まった若者たちも、準備不足と手違いから空腹に苦しむこととなり、最後は結局レストランで食事をする羽目になり、予定と違って高くついてしまったという顛末を、ユーモアに満ちた文体で学生の様子を再現力豊かに書いたものです。

参加者にとっては初めてのテキストとなるため少し難しく思われたようです、それでも参加者は12名と、ドイツ語部門としてはかなりの人数が集まりました。

審査にあたったのは、ドイツ語の授業をお願いしている鶴田涼子先生と山尾涼先生、それから経営学部所属のドイツ語担当教員である私(島田了)の3人で、表現力と発音・アクセントの合計点で審査を行いました。

決して難易度は高くないテキストですが、授業であつかったものではないためそれなりの準備と練習が必要です。基本となる発音・アクセントの確かさはもちろんのこと、今回はユーモアのある文体を表現するための深い理解と技術、そして若者の生活をどれだけ身近に再現できるかといった能力が必要とされます。それでも参加者は各自で

熱心に練習に取り組んだ様子で、その完成度を高いレベルで競う結果になりました。参加者いずれも優劣つけがたく、残念ながらわずかの差で順位を決めざるを得ませんでした。結果は、第一位(優勝) 滝藤寿士さん (07M3286)、第二位 原田知沙さん (09J1244)、第三位 和田 亜由美さん (08M3631) となりました。

他の外国語に比べて履修者が多いとはいえないドイツ語部門ですが、これだけ多くの参加者がいて、高いレベルで結果を出してくれたことに満足しています。

今回参加した学生だけでなく愛知大学でドイツ語を履修する学生の皆さんの関心や質の高さは常々大いに評価しています。法学部・経営学部といった社会科学系の学部を中心としたキャンパスのため、外国語の学習時間は決して多いものとはいえませんが、その環境も必ずしも満足のゆくものではないでしょう。それにもかかわらずドイツ語に積極的に取り組む学生がかなりの数で存在するということは、ドイツ語の担当教員として大変うれしく思います。

今年の春、私たちの生命を脅かす自然の暴力のすさまじさに多くの人が震えあがりました。そうして今日なお多くの人々が人間を脅かす絶望や無力感と懸命に戦っています。その困難な戦いのなかで、私たちの言葉はいったいどんな力を持ちうるのでしょうか。かつてドイツの詩人は歌いました、「澄んだ言葉は美しい行為を呼び起こす」と。今回明らかになったように私たちの日常生活は実に多くの危険や困難に取り囲まれています。その危険のなかで、私たちはささやかな幸せを守ってゆく覚悟を固めなければなりません。そのための美しい行為につながってゆく澄んだ言葉を見つけるために、私たちは日々の生活と同じだけ真剣に言葉に向かい合っていく必要があるでしょう。

最後になりましたが、今回も意欲的な学生の皆さん、語学教育研究室にかかわっている多くの教職員のみなさんのおかげで、このような意義のあるコンテストを続けることができましたことに、心よりお礼申し上げます。(島田 了)

フランス語部門

2010年度のフランス語部門のコンテストは11月29日(月曜日)に名古屋校舎の中央教室棟3階の第1研修室にて16時40分から実施された。例年通り、国際コミュニケーション学部のラッセン先生に審査委員長を務めていただいた。名古屋校舎の学生としては初めて、ネイティブの先生に発音等を審査していただくことになった。気のせいかな、出場する学生はもちろん、フロアに30人ほど集まってくれた学生たちも緊張しているようであった。今年度は11名の学生がコンテストに出場してくれた。内訳は3年生が1名、2年生が5名、1年生が5名であった。

今年も例年通り、予選と本選に分けて行い、課題の朗読を行った。今年は1年生と2年生以上で、課題を分けることにした。予選ではちょうどコンテストが行われている時期に授業で習っている箇所の朗読をすることにした。

今年は1年生がとてもよく練習してきたので、予選では上級生の方が圧倒される形となった。エントリーした11人のうち、予選を勝ち抜いた3年生1名、2年生2名、1年生3名で決戦をおこなった。

決戦は他のフランス語教科書から、予選とほぼ同レベルと思われる部分を抜粋して実施した。1年生にとってはおおむね授業と同程度であったが、2年生以上にとってはやや難しかったようで、苦戦したようであるが、いずれも甲乙つけがたい接戦となった。慎重な審査の結果、入選者は以下のとおりである。

第1位 08M3595 上田 真唯

第2位 10J1380 鮎川 瑞絵

第3位 10J1093 皆川 昌潤

上田さんは落ち着いた話し振りと同時に、発音の誤りがほとんどない正確さが評価された。さすがに3年生の実力をいかんなく発揮した感があった。2位と3位を1年生が独占し、1年生のがんばりがよく現れていた。鮎川さんは1年生とは思えない正確な発音が評価され、皆川君もジャッジ上はほとんど遜色のない出来映えであった。ほんのわずかにミスの数が多かっただけで、二人ともしっかり練習してきたことがうかがえた。入選を逃し

た2年生と1年生も決して大差の違いではなく、ほんのわずかの差であって、全員がよく勉強してきたことが伝わってきて、ラッセン先生も田川先生も私も大変心強く思った。

ここ数年の傾向として、1年生の活躍が目立つ。2年生以上の学生諸君にも一層の奮起を期待すると同時に、1年生の時の熱心さを忘れないように、コツコツと勉強を継続していれば、必ずフランス語を身につけることが出来ると付け加えておきたい。

なお、講評の最後にラッセン先生から2012年からは車道校舎で一緒に勉強することになるので、ぜひともラッセン先生の授業を受講して、さらにフランス語に磨きをかけて欲しいとの励ましがあった。(中尾 浩)

中国語部門 (法・経営)

「第16回外国語コンテスト中国語 (法学部・経営学部部門)」は2010年11月29日 (月) 午後4時50分より211教室にて行われました。三年生3名、二年生42名、一年生2名の合計47名の学生が参加しました。今回の課題も「課題文の朗読」で、基礎部門 (「基礎」履修中の学生) と応用部門 (「応用・発展・演習」履修中の学生) とに分けて実施しました。今回は新たな取り組みとして二つのことを試みてみました。一つは名古屋情報メディアセンターの協力のもと、参加者が Moodle にて課題文朗読の音声をダウンロードすることができるようにしました。その結果、今までのテープダビングと比べ、より使いやすく便利になり、学生たちの事前練習の機会が増えたものと思われます。もう一つは応用部門で本コンテストを実施して以来、はじめて中国語発音記号「ピンイン」がついていない文章による朗読コンテストを実施したことです。いうまでもなく、第二外国語の学生たちにとって、ピンインなしの長文の朗読は非常に難しいことですので、応募者がかなり減るのではないかという不安を抱きながらの決断でした。しかし結果は、予想に反して昨年の参加者54名と大差のない人数となり、安堵しました。

今回の課題文は、「子認父」というタイトルの中国の笑い話で、その内容は「大通りで交通事故

が発生した。周囲は通りがかりの人たちでびっしり囲まれた。ある野次馬根性旺盛の男が割り込んで中を見たいと思った。だが、あらん限りの力を尽くしても入って行けなかった。かれはハッとひらめき叫んだ。「どいてくれ！早くどいて！死んだのは僕の父親なんだよ」周りの人たちはかれに道をあけた。男は中に入り一目見るなり、穴があったら入りたくなった。なんと、車にひかれて死んでいたのは、一匹の犬だった」というものでした。

応用部門では発音記号のピンインがついていなかったこともあり、会場はこれまでにない緊張感に包まれていました。深呼吸の音も何度も聞こえてきましたが、熱意ある参加者のおかげで、今回もレベルの高いコンテストとなりました。審査員は経営学部の矢田博士先生と法学部の鄭が担当しました。厳正な審査によって、次の入賞者が決まりました。

第1位	09J1344	朝倉 勇季
第2位	09M3178	児玉 直宏
第3位	08M3530	森本 梨華子

第1位に入賞した朝倉勇季さんは、きれいな発音で最後まで詰まることなく朗読文を流暢に暗唱しました。会場全員その素晴らしさに熱い拍手を送りました。第2位の児玉直宏さんは、正確な発音でスムーズに朗読をこなした点で高く評価されました。第3位に関しては決めるのが難しく、2名の候補者が選ばれ決定戦を再度行いました。その結果、森本梨華子さんが入賞しました。丁寧でスムーズな朗読という点が入賞に結びついたと思います。

今回のコンテストによって得られた経験と成果が今後に役立てられることを期待しています。

(鄭 高咏)

中国語部門 (現中)

第16回外国語コンテスト中国語部門 (現中) は、2010年11月24日 (水) 16:40から、課題部門10名、自由部門8名の合計18名が参加して行われました。審査は薛鳴先生、戴蓉先生、安部の3名で行いましたが、今回は昨年に比べ参加者が増え、審査員一同ほっとすると同時に、課題文暗唱部門 (1年生のみ)、自由課題部門共にすばらしい発表が多

く、審査は昨年より更に難しくなり、大変苦労しました。最近、このコンテストへの関心が再び高まっており、学生諸君も自分の将来を考え、色々なことにチャレンジしようとしているのだと実感させられました。

課題部門は、「三只老鼠（三匹のねずみ）」という文章を暗誦してもらいました。内容は、三匹のねずみが油壺の油を盗み食いしようとしています。油壺が大きかったので、三匹で相談し、一匹がもう一匹の尻尾をくわえ、三匹がつながった状態で油壺の中に入り、交替で食べようとしています。最初の一匹が食べ始めた時、上の二匹が疑心暗鬼となって約束を破り、結局みんな壺の中に落ちてしまったというお話です。出場者はこの寓話の意味をよく理解し、それぞれのねずみの自分勝手な考えを、単に暗唱するだけでなく、表情豊かに表現してくれました。

厳正な審査の結果、次の3名が入賞しました。

- 1 位 10C8036 吉田 翔子
- 2 位 10C8046 伊藤 栞
- 3 位 10C8102 早瀬 尚吾

自由部門は8名の参加で、全体にレベルも高く、正に激戦で、審査員としても順位を付けるのに本当に苦労しました。その中で入賞したのは、次の3名です。

- 1 位 08C8022 下地 江梨奈
- 2 位 09C8112 竹田 瞳
- 3 位 10C8161 花岡 啓介

1位の下地さんは、「我在北京卖T恤衫（北京でTシャツを売る）」というテーマで、北京のイトーヨーカドーで実際にTシャツを売ったというインターンシップでの体験を基に、物を売ることの難しさと、何か問題に直面した時にその原因をしっかりと分析し、自分から積極的に問題解決に向けて行動することの大切さを、ユーモアも交え表情豊かに発表してくれました。2位の竹田さんは、「留学中一件小事（留学中のある出来事）」というテーマで、現地プログラムで天津に滞在していた時に起こった、日中間の過去の歴史が原因のちょっとしたトラブルから、外国語を学ぶ時に、単に言語だけでなくその国の歴史や文化等についても学ぶ必要があると実感したと、的確な中国語で話してくれました。3位の花岡君は、「我和漢語（私

と中国語）」というテーマで、これまでどのようにして中国語を学んできたか、そしてその過程で発音の重要性に気づいたことなどを、自らの体験を基に具体的に話してくれましたが、中国語習得への熱い思いが伝わってくる発表でした。

（安部 悟）

韓国・朝鮮語部門

第16回外国語コンテスト「韓国・朝鮮語」部門の本選は、2010年11月30日に実施された。参加者は例年よりは少なく16名であったが、審査員2名（韓先生、常石）を交え熱戦が繰り広げられた。全員が実によく練習・準備しており質の高い発表が多く、そのため今回も選考には審査員2名は苦労したが、次の3名を入賞者とするに至った。

- | | | |
|-----|--------|-----------|
| 1 位 | 和田 裕子 | 06 J 1377 |
| 2 位 | 本山 由奈 | 10 C 8045 |
| 3 位 | 中村 由希恵 | 07M3193 |

1 位 和田裕子さんの発表は本紙にも掲載されているが、韓国語なので簡単な解説を添えておきたい。内容は姉妹校留学中に地方の友人の実家に招かれ、その母親や家族たちとともにキムチをつけるという体験談であるが、韓国では「キムジャン」と言って例年晩秋には数か月分のキムチをまとめて山のように作る文化がある。膨大な量のキムチ作りだけに一族や近所の人々まで女性たちが総出で集まり、まる一日をかけてキムチを作りながら楽しく語り合うという韓国における女性および家庭での国民的・民俗的文化でもある。こうした韓国の「キムジャン」文化を直接体験できたのも、留学していればこそ可能な体験だったと言える。和田さんの発表は、これを伝えている。

ところで外国語コンテストは今回で16回目をむかえ、同コンテストに発表者として参加した学生数だけでも1,500名をはるかに超える。しかし新校舎移転にともない今後のことが未定であるだけに、今回は一点だけを回想させていただきたい。それは最初期の「表彰式兼発表会」が生協食堂を借りて立食パーティー形式で行なわれ、丁度時期も合致してまるでクリスマス・パーティーの様相

を呈して盛大に行なわれていたという点である。今年の秋には第17回目のコンテストが開催されるが、例年以上にしっかりまとめたいという気になってしまう。(常石希望)

日本語部門

外国語コンテスト「日本語部門」は、日本語を母語としない者を対象に開かれています。毎年「留学生の見た日本」というテーマで、自らの体験を盛り込み、身近な出来事から意見や考えを述べるのが課題です。

法・経・現中三学部の1年次の留学生は、毎年全員このスピーチに取り組んでいます。60名近くにもなりますから1年生だけの予選を行います。予選は約20名ずつに分かれたクラスごとに行い、それぞれ3名の代表者が選ばれ、計9名が本選に進みました。2年次以上の留学生は、予選を経ず、直接本選に出場できますが、参加者は非常に少ない状態です。しかし、今回も昨年同様1名の参加者があり、ここに特筆したいと思います。今後も上級生諸君の参加を期待します。

2010年11月16日の本選では、10名の参加者が大勢の聴衆の前にスピーチを競い合いました。

審査は、日本語科目担当教員3名(架谷・鈴木・梅田)、学生審査員2名(留学生と日本人学生ともにスピーチ入賞経験者)、聴衆約50名の投票によって行い、以下3名が入賞しました。

1位 現代中国学部 10C8205 呉 思邈
「勤勉な精神」

2位 現代中国学部 10C8204 翁 秀艶
「日本の礼儀」

3位 現代中国学部 10C8188 顧 世権
「伝えたい日本 探究精神」

(敬称略)

「留学生の見た日本」という単一のテーマですが、発表者はそれぞれ独自の着眼点から原稿を書き起こしました。おしゃれなカフェで読書する日本のお年寄り、マニュアル通り一色に染められる日本の就活学生...彼らが題材とする日本人は様々ですが、どれも現代日本社会の事実の一部を切り取ったものです。

スピーチの技術面においては、イントネーショ

ン、間の取り方、アイコンタクトなど、聴衆との言語的・非言語的コミュニケーションを各人よく意識していましたが、例年より控えめな印象が残りました。もっと大胆な演出で聴衆を感心させてほしいものです。次回はさらなる高みを目指してください。

ともあれ、コンテスト日本語部門に参加できない数多くの日本語を母語とする学生には、ぜひ一人の聴衆として留学生の声を聞きに来てほしいと思います。きっと新しい発見があるはずです。

(梅田康子)